2003年9月号　安全と健康

2001年5月22日 第三種郵便物認可
通巻第244号 2003年 9月28日発行（毎月1回28日発行）

TOSHC

Safety and Health

安全と健康

No.244

今月のおススメ改善事例

メコンデルタで活躍する

脱穀機は中国製の中古品が多い。

*危険な箇所にガードをつける（写真 ①③）

*稲の投入口の高さに合わせたステップを付ける。（写真 ①③）

*米の受け口を腰の高さに上げる（写真 ②③）

古い機械でも随所に改善がほどこされている。

【▲写真 ①】

【▲写真 ②】

【▲写真 ③】

●全国労働衛生週間ー人間らしい働き方と職場を目指して…2
●定例会報告…3
　アスベスト問題の実情と対策を考える
●参加型活動国際研修ーメコンデルタ2003の報告…4
●ILO総会が参加型トレーニング活動の重要性を強調…6
●ｻﾏｰﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ
「労災職業病と外国人労働者のいまを歩く」…7
●アジアネットワーク年次会議…10
●職場の取り組みあれ・これ
　第2回鹿児島労働安全衛生学校…12
●地域から・職場から
　奄美大島から出稼ぎ労働ー悪性胸膜中皮腫…14
●リレーエッセイ 邂逅ー出会いー…15
●センター活動日誌&スケジュール…16

特定非営利活動法人
東京労働安全衛生センター機関紙
〈頒 価〉 200円

発行人：平野敏夫
住 所 ：〒136-0071 東京都江東区亀戸7-10-1 Zビル5F
Tel (03)-3683-9765　Fax (03)-3683-9766
E-mail　etoshc@jca.apc.org
Homepage URL　http://www.jca.apc.org/etoshc/
振 替 ：【郵 便】00160-8-183157
【中央労金亀戸支店】284-1612779
発行日：2003年 9月28日

TOSHC

地域から・相談から

■奄美大島から出稼ぎ労働
鹿児島安全センター（準）と連携し
悪性胸膜中皮腫労災認定

■昨年の「アスベスト・じん肺ホットライン」で鹿児島県の奄美大島から相談を受けた。建設業で長年働き59才で悪性胸膜中皮腫になってしまったＴさんの娘さんは、「治らない」と医師に告げられた父の病気の原因を知り、補償を求めたい、と電話口で語った。遠方でもありファックスで職歴を確認していった。Ｔさんは奄美大島出身、高校卒業後1962年から関西へ出て、鉄工所勤務などを経て、シャッター会社でシャッターの設計施工に従事。その後会社は取り付け工事を下請化し、Ｔさんは同僚とともに下請け会社で取り付け業に従事した。1969年病気のため帰郷、快復後は一時期シャッター取り付け業を経営するが、九州電力の下請け会社の事業主となる。Ｔさんと家族は九州電力での作業でアスベストに曝露したと考えていたが、吹付けアスベストがある変電所での作業はわずかで、他にはアスベストに曝露する作業はなかった。

■家族にセンターに来所してもらい、また、鹿児島安全センターにも協力を要請して、鹿児島センターの吉海祐作さんに奄美大島にＴさんを訪ねてもらい、聞き取り調査を続けた。その結果、シャッター工事でアスベストに曝露していた実態が明らかになった。

1960年代はスーパーマーケット等の大型店舗が展開を始める時期で、新興大手スーパーが多くの新店舗を建設した。シャッターは店の正面だけではなく、火災時に延焼を防ぐためにエスカレーターの周囲に設置された。Ｔさんは全国各地で、この防火シャッターを専門に取り付け工事を行っていたのである。当時の鉄骨建築には耐火のためアスベストが必ず吹付けられていた。シャッター取り付けは吹付け工事の直後か同時並行的に行われ、吹付け工事のアスベスト粉じんの舞う中、自らも吹付け材を剥がしながら施工していたのである。

曝露の事実は明らかになったが、主に取り付け工事を行ったのはシャッター会社の下請け会社で働いていたときだが、このときに労働者であったか、事業主であったかという課題が残っていた。事業主であれば、特別加入していないので労災での補償は受けられない。このため当時の経営者で今もシャッター工事を行っているＮさんを尼崎に訪ねた。Ｎさんは、かつての仲間の不遇を悼む、紳士的な好人物で、確かに自分が社長で、Ｔさんを雇用して、現場作業に従事してもらっていたことを証言し、監督署へ文書でその旨提出することを約束してくれた。この証言が転機となり、尼崎労基署へ労災申請を行うことができた。５月27日Ｔさん永眠。７月労災認定。残念ながらＴさんが労災認定の朗報を聞くことはなかった。当初の聞き取り調査を迅速におこなっていれば間に合ったかもしれない、と悔いが残った。現在、遺族補償を請求中である。

■40年前にわずか６年間従事した作業でのアスベスト曝露がＴさんの命を奪った。無念、理不尽そして不気味な事実である。例えば、奄美大島や沖縄から関西へ、また、北海道や東北から関東へ、多くの若者が希望を胸に新たな社会へ旅立ってきた。仕事を覚え、家庭を築き、老いて引退し、ほとんどの人はその生を全うするが、アスベストのために突然命を奪われる人も確実にいることをＴさんの死は訴えている。曝露の事実が消えない以上、これからも被災者が出続けるのだ。せめて、正当な補償を全ての人が受けられるために、行政や関係者の努力を期待したい。(事務局　外山)